

発行
北海道ポーランド文化協会

〒006-0006
札幌市手稲区西宮の沢6条
1丁目16-1-210 佐光方
電話・FAX 011-215-6696

POLE

第84号 2015.1.1
北海道ポーランド文化協会会誌

samitsu0204@gmail.com
http://hokkaido-poland.com/

ポーランドに関する
ご寄稿募集中！
事務局へご連絡を！

〈第71回例会ご案内〉

カシュブ詩人 ヤロミラ・ラブダ 朗読会



日時 2015年2月5日(木) 18:30～

(開場 18:00)

入場無料、事前申し込み不要
日本語通訳・解説あり

会場 北海道大学クラーク会館 3F
国際文化交流活動室
(札幌市北区北8西7)

お問い合わせ 事務局・佐光まで
(Tel/e-mai: 上左右を参照)



2015年、北海道ポーランド文化協会のイベントは、カシュブ詩人ヤロミラ・ラブダさんを迎えて詩の朗読会から始まります。ポーランド北部カシュブ地方の文化や言語に触れるまたとない機会です(カシュブ語とラブダさんについては次のエッセイもご覧ください)。

当日は、まずカシュブ語について野町さんのお話、次にラブダさんによるカシュブ語の自作詩の朗読(日本語訳あり)と解説(通訳あり)、最後は会場のみなさんとのフリートークを予定しています。文化・文学の香り高い集まりになるものと、今からとても楽しみです。どなたでもご参加いただける楽しいイベントですので、ぜひお知り合いをお誘いのうえご参加ください。(佐光 伸一)

カシュブ人とその言語および文学 ～詩人ヤロミラ・ラブダの来日に寄せて～

野町 素己

ポーランド北部のバルト海近くにカシュブ地方と呼ばれる地域がある。ここにはポーランド語に近い言語を話すカシュブ人が住んでいる。その話者数は11万人弱と小規模であるが、方言の多様性が際立っており、20世紀初頭の研究者フリードリヒ・ロレンツは、76の方言に分類している。特にバルト海に面する北部方言は古風な特色を保っており、内陸部の南部方言の話者との相互理解は困難であるとさえも言われる。

カシュブ人の言語が独立した言語か、それともポーランド語の方言かという議論は、研究者、政治家、作家、活動家などによって100年以上にわたり続けられてきた。言語と方言の違いは、言語自体の特徴に基づくだけでなく、政治的な要因、言語に関わる歴史や文化、その担い手の民族意識の問題が多分に含まれる。ポーランドでも社会主義以前には上記の議論が自由になされたが、社会主義時代にはポーランド語の特殊な一方言という扱

いを受けていた。しかし社会主義崩壊後には、ポーランド政府は多言語・多文化政策をとる EU と歩調を合わせ、2005 年、カシュブ語はポーランド政府が行政や教育といった公的領域での使用を認める「地方言語」という地位を得た。つまり今日では政治的にも「方言」ではなく、「言語」ということができるのである。しかし、これはカシュブ語が、大言語がもつ安定した文章語形態を有すことを意味するわけではない。カシュブ語は専ら日常会話で使用され、地域差も非常に大きい。さらに今や全カシュブ人の母語でもあるポーランド語の影響も大きく、カシュブ語は今も文章語形成の過程にある。

カシュブ語の発達において最も重要なのは文学活動である。その端緒はフロリアン・ツェイノヴァ(1817-1881)に見られる。彼は独自の正書法を作り、文学活動を行った。当時、十分な理解を得られなかったため、その活動が結実したとは言い難いが、後世に大きな影響を残した。カシュブ語で文学作品を執筆する伝統は限定的であったが、ヒェロニム・デルドフスキ(1852-1902)に引き継がれ、さらにカシュブ語の独自性を主張しながらもポーランドとの一体性を重んじる集団「若きカシュブ人」を率いるアレクサンデル・マイコフスキ(1876-1938)によって発展された。特にマイコフスキによる英雄譚「レムスの生涯と冒険」(1938)は、カシュブ語の高度な文

学的可能性を示す最高傑作であり、現在も広く親しまれている。その後、マイコフスキの影響を受けつつ、カシュブの言語と民族の独自性をより強く打ち出した「カシュブ連合」が結成され、地元の教師アレクサンデル・ラブダ(1902-1981)を中心に、文学活動や標準語形成の試みなど多様な活動が行われた。社会主義時代に入ると、ポーランド政府の立場と異なる「連合」の活動は禁止され、その結果、カシュブ語文化は低迷した。それでも「フォークロア」や「方言文学」など様々な表現形式をとり、その言語文化は継承され、中でも詩はカシュブ文学の主要で伝統的なジャンルとして確立し、社会主義時代にも多くの作品が残された。

今回来札するヤロミラ・ラブダ(Jaromira Labudda)氏は、「連合」の指導者であった父アレクサンデルの血と精神を引き継ぐ詩人で、1977 年の文壇デビュー以来、精力的に執筆活動を続けている。また、カシュブ語が公式に認められていない 1990 年代からカシュブ語教育を始めた、いわばカシュブ語復権の先駆者でもある。

日本ではまだ馴染の少ない分野であるが、激動の時代を経験したその知られざる文化の魅力を、ここ札幌で共有できることをうれしく思う。

(のまち・もとき、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター准教授)

〈協カイベント報告〉

ポーランドの巨匠ニジャウコフスキの アートマイム日本初公演を観て

霜田 英磨

去る 11 月 7 日(金)の晩、東京・両国にあるシアター X (カイ)で初日を迎えた、ポーランドの巨匠ステファン・ニジャウコフスキによる「アートマイム」公演を、劇場のご招待により鑑賞させていただきました。

当日はあいにくの小雨模様でしたが、劇場の入口で、今回出演されるマイム・アーティストの児真順子さんのご両親、児玉さんご夫妻のお出迎えを受けました。この日本初公演は、児玉さんの熱心な働きかけにより、シアター X の主宰者の上田美佐子さんが自ら数回ポーランドへ足を運んで実現されたという経緯は、ニジャウコフスキ氏によるプレゼンテーションの謝辞の中で紹介されました。また、開演に先立ち、2年前にシアター X の中に設立された「日本アートマイム協会」の主宰者 JIDAI 氏からも、児玉さん、上田さんへの謝辞がありました。

プログラムは大きく以下の5部に分かれ、全4時間の長丁場でした。

1. ニジャウコフスキ氏と受講者男女 16 人による公開ワークショップ (舞台上でリアルに実演)
2. 「震える身体」上演 (児真さん出演の短編)



3. ニジャウコフスキ氏によるプレゼンテーション(児真さん制作の映像を交え、通訳を介した説明)
4. テリー・プレス氏によるプレゼンテーション(アートマイムの4つのポイントについて説明)
5. 「スピリット・オブ・サウンド」上演(児真さんと海外アーティスト4人による7体の人物大人形を用いた演技)

アートマイムには台詞がありません。最後の公演は1時間を超える大作で、ポイントを考えながらの鑑賞は、能舞台のような幽玄の世界と、無声映画より難解な印象が複雑に絡み合うものでした。終演後、皆さんと写真を撮っていただきました。児玉さんに改めて御礼申し上げます。



(しもだ・ひでまろ、本会東京事務所／写真提供、シアターX)

ステファンカンパニー東京公演を終えて

児玉 忠征

多くの皆様のお力で、ステファンカンパニー公演は連日満員の大盛況でした。感謝、感謝です。

娘(順子)はピアノとクラシックバレエからマイムに変わり、当時カナダ人のプレス先生(今回客演)の下で研鑽を積んでいたとき、たまたまホームページで、アメリカにおけるマイム講習会にポーランドからステファン・ニジャウコフスキ氏が来ることを知り、単身で参加しました。その後、娘はワルシャワへ渡りました。私はただ見守るしかありませんでした。

転機は、2005年9月ポーランド映画週間『今日・明日』を観に行き、NHKドラマプロデューサーで、大河ドラマの生みの親の合川明様に出会ったことです。ワルシャワ在住の松本照男さんをご紹介いただき、お二人の間をとりもちつつ、両国を繋ぐことに携わろうと決めました。

すると、娘がワルシャワで出会った岩手県在住のポーランド児童文学翻訳者・田村和子さんのお力で、ワルシャワのパヴィアク監獄で37歳で銃殺されたカミラ・ジュコフスカさんが秘かに作った美しい日本人形の悲話を描いた、マイムとピアノ舞台作品『木は全て見ていた～パヴィアクの日本人形～』の公演が実現しました(2007年12月9日、金ヶ崎町中央生涯教育センター)。合川様に相談してNHKの取材をお願いし放送していただき、田村さんには日本人形の話の本にして、岩波ジュニア新書から出版していただきました。その恩人合川様は残念にも今年4月87才でお亡くなりになりました。

さて、2005年11月に娘の結婚式で初めてワルシャワを訪問、その後ニジャウコフスキ氏を紹介されました。厳しそうな芸術家でした。何時か日本へ呼ばたいと考え、誰に頼まれたわけでもありませんが、日本招致について勝手に調べ行動を起こしました。

しかし経験の無い私では糸口すら見つからず3年が過ぎ、あきらめかけた時に、朝日新聞で両国シアター・カイ上田美佐子芸術監督の記事を見て訪問し、ニジャウコフスキ先生のことをお話したら、直ぐにワルシャワへ飛んでくださいました。さらに前駐日大使ヤドウィガ文化遺産省顧問にニジャウコフスキ先生と会っていただき、本物の芸術家との評をいただきました。こうして皆様のお力添えで日本公演が実現しました。

ステファン先生には、来日土産の中に『文楽・近松門左衛門作・曾根崎心中』DVDを加えて日本の伝統文化をご紹介します。公演の後は、浅草・浜離宮・貿易センタービル展望台・日本料理店などを案内して、皆さんと楽しい時間を過ごしました。

最後にこの紙面をお借りして、上田美佐子様、ヤドウィガ様と、亡き合川明様に心から感謝を申し上げます。(こだま・ただゆき、本会会員)



マイム終演後に(左2番目から)筆者、霜田氏、順子、上田氏、妻弘子、左右は赤平高校同窓西多夫妻

〈第70回例会報告〉

『ヤン・カルスキ展2014』札幌開催

～ヤン・カルスキから何を学ぶのか～



尾形 芳秀

ホロコーストの証言者として知られるヤン・カルスキの生誕100周年にあたる今年を、ポーランド政府は「ヤン・カルスキ年2014」として、各種の行事を世界的に展開してきた。その一環として「ヤン・カルスキ パネル展」が東京に次いで札幌でも開催された(10/27-11/9、札幌エルプラザ 2F交流広場にて)。

そもそも「ヤン・カルスキ」とは何者なのか。カルスキは実名ではなく密使のコードネームで、本名は「ヤン・ロムアルト・コジエフスキ」(1914-2000)という。ウッチ市に生まれ、ナチスによるホロコーストの証言者となった。

パネルの概要

展示パネルは総数 22 枚あり、これを一覧するだけでヤン・カルスキの生涯を知ることができた。

- ①世界は知った——ヤン・カルスキが果たした人道的な任務／②未来を予知していた証言者／③ポーランド性の坩堝(るつぼ)に生まれて／④愛国的な家系／⑤カルスキの学生時代／⑥外交官の夢潰れる／⑦敗北の苦い味／⑧間一髪、死を免れる／⑨死神との二度目の遭遇／⑩地下国家の二重構造／⑪カルスキ・ユダヤ人の運命を知る／⑫「死の収容所」への中継基地／⑬カルスキ、懐疑論者に迎えられる／⑭密使から公人へ／⑮カルスキの戦争回想録、ベストセラーに／⑯ジョージタウン大学教授／⑰ポーラー、優雅、そして悲劇／⑱新たな名声／⑲人類の「第二の原罪」／⑳ホロコーストの全体像／㉑ヤン・カルスキ——人道主義の英雄／㉒死去、告別式、遺産に——

ポーランドのユダヤ人に対するホロコースト(ランズマンの映画から「ショアー」とも呼ばれる)やアウシュヴィッツ強制収容所の悲劇はよく知られているが、第二次世界大戦中にナチス・ドイツによる大量虐殺を世界に知らせる行動をとった人物がいたことはあまり知られていない——というより、彼の人道的な行為は米英により黙殺されたのである。

彼はポーランドのレジスタンス活動家で、学業優秀で外交官となるも、まもなく第二次世界大戦が勃

発、ポーランドはナチス・ドイツの電撃戦に敗退、領土をナチス・ドイツとソ連に分割される。彼は、初めはソ連、次いでナチス・ドイツの捕虜となり、ゲシュタポによる激しい拷問を受け自殺を図るが、搬送先の病院でレジスタンスの同志により救出される。数々の偽名や身分を使い(最終的なコードネームは「カルスキ」、並外れた語学力と記憶力を武器として、ポーランド地下国家の活動に貢献した。

1942年夏、地下国家とユダヤ人指導者らの要請でワルシャワ・ゲットーや強制収容所に潜入、そこで目撃したナチスによるユダヤ人大虐殺を世界に伝えた。密使カルスキの報告は、ホロコーストの事実を諸外国に伝える最初の証言となったが、列強は様々な思惑からこれを黙殺し、結局ユダヤ人を救うための有効な措置がとられることはなかった。

彼は偽名のまま米国に留まり、終戦前の1944年にニューヨークで回想録を出版するとたちまちベストセラーとなり翻訳も出たが、中傷や思惑もあり、戦後は長らく忘れられていた。ワシントン D.C.近郊にあるカトリック系のジョージタウン大学で国際関係学部教授としてひっそり暮らし、30年以上の沈黙ののち、フランスの映像作家クロード・ランズマンによるドキュメンタリーの傑作「ショアー」(1985)の証人として再び注目を集めるようになった。

開催期間中、会場ではパネルを丹念に見入る来場者もあり、この展示は一人でも多くの方々に興味をもっていただく貴重な機会になった。(30名ほどの方がご記帳くださいました。)



オープニングセレモニーで 安藤会長と
広報文化センターのヴァチンスキ氏(右)

(参考)ヤン カルスキ — 人類のヒーロー (Google Cultural Institute)

第28回定例総会&懇親会報告

2014年10月31日(金)午後6時30分から北海道大学クラーク会館3F 国際文化交流活動室において、第28回総会及び懇親会が開催されました。総会には会員17名、懇親会には日本人17名、ポーランド人21名が参加し、料理とお酒と歌で交流を深めました。(佐光伸一)

第1号議案 2014年度(2013.10-2014.9)事業報告

1. **第27回総会・懇親会** 2013年11月8日(金)総会18時～、懇親会19時～、北大クラーク会館3F 国際文化交流活動室、参加者:総会15名、懇親会25名

2. 例会

1) **第68回例会**「午後のポエジア」2014年6月14日(土)14時開演、北大クラーク会館3F 国際文化交流活動室、参加者約80名

2) **第69回特別例会**「権太時代に生きたポーランド人～彼らはどこから来て、いかに生き、どこへ帰ったのか～」講師:尾形芳秀、2014年6月28日(土)14-16時、駐日ポーランド共和国大使館(東京都目黒区)、参加者約50名

3. 会誌「ポーレ」発行

第81号(2014年3月20日)、82号(5月15日)、83号(9月15日)の3回発行

4. 共催/後援等事業

1) ヴィトルト・ルトスワフスキ生誕100周年記念講演&演奏会～ズビグニェフ・スコヴロン教授を迎えて～《ポーランド楽派を聴く》～ショパンとルトスワフスキ～、2013年10月15日(火)19時開演、札幌大谷学園百周年記念館同窓会ホール、講師:ズビグニェフ・スコヴロン、三浦洋、演奏:松井亜樹(ソプラノ)、高橋健一郎、坂田朋優、川染雅嗣、谷本聡子(以上、ピアノ)、菊地秀夫(クラリネット)、参加者約80名、主催:「W.ルトスワフスキ生誕100周年記念講演&演奏会」実行委員会;後援:本会、ポーランド広報文化センター、札幌大谷大学・札幌大谷大学短期大学部、札幌市・札幌市教育委員会、日本アレンスキー協会、日本ショパン協会北海道支部、北海道作曲家協会、札幌音楽家協議会

2) 記念セミナー「ポーランドのアイヌ研究者ピウスツキの仕事―白老における記念碑建立に寄せて―」2013年10月20日(日)9-17時、北海道大学学術交流会館講堂、参加者約200名、主催:本会、北海道大学スラブ研究センター;共催:グローバル

COE プログラム「境界研究の拠点形成」;協力:駐日ポーランド大使館、ポーランド広報文化センター
3) 北大祭におけるポーランド留学生の出店、2013年6月5日(木)～8日(日)9-21時、北大総合博物館前テント、主催:北海道大学ポーランド人留学生会;後援:ポーランド広報文化センター、本会

第2号議案 2014年度収支報告

1. **2014年度収支報告** 7頁の資料をご参照ください。
2. **2014年度監査報告**
(氏間多伊子・小林暁子・斎田道子)

第3号議案 2015年度(2014.10-2015.9)事業計画

1. **第28回総会・懇親会** 2014年10月31日(金)総会18時30分～、懇親会19時30分～、北海道大学クラーク会館3F 国際文化交流活動室

2. 例会

1) **第70回例会** ヤン・カルスキ生誕100周年記念展示会「私はホロコーストを見た―ヤン・カルスキの黙殺された証言」2014年10月27日(月)～11月9日(日)8:45-22:00、札幌エルプラザ2階交流広場

2) **第71回例会**「カシューブ詩人ヤロミラ・ラブダ朗読会」2015年2月5日(木)18:30～、北海道大学クラーク会館3F 国際文化交流活動室

3) **第72回例会** 朗読会「午後のポエジア」2015年6月頃(予定)、会場未定

4) その他

(ア) 創立25周年記念誌の発刊、2015年3月末(予定)

(イ) 発刊記念パーティ(未定)

3. **会誌「ポーレ」発行** 2015年1月、5月、9月の3回

4. 後援/協力事業等

1) さっぽろオペラ祭 2014・北海道二期会創立50周年記念 オペラ「ショパン」主催:北海道二期会、さっぽろオペラ祭実行委員会、2014年10月12日(日)・13日(月)、札幌市教育文化会館小ホール、本会后援

- 2) 遠藤郁子デビュー50周年記念ピアノリサイタル「北海道～パリ～そしてポーランド」2014年11月8日(土) 札幌コンサートホール Kitara 小ホール、本会後援
- 3) ポーランドが生んだアートマイム、ステファン・ニジャウコフスキ初来日！公開ワークショップ+プレゼンテーション+上演“サイレンス・オブ・ザ・ボディー / Milczące Ciało / 沈黙する身体—アートマイム”ワルシャワ—東京、総合芸術監督:ステファン・ニジャウコフスキ、出演:児真順子ほか、2014年11月7日(金)～10日(月)、東京・両国シアターX(カイ)、本会協力

第4号議案 2015年度予算案について

7頁の資料をご参照ください。(氏間多伊子)

第5号議案 2015年度人事案について

2015年度役員等 下線は新任者

(会則第6条に基づく役員)

会長：安藤厚

副会長：小笠原正明、霜田千代麿

運営委員：安藤むつみ、氏間多伊子、薄井豊美、大久保律子、尾形芳秀、栗原朋友子、越野剛、小林美保、佐々木保子、高橋健一郎、富山信夫、塚本智宏、中島洋、三浦洋、アグニェシュカ・ポヒワ、ラファウ・ジェブカ

事務局長：佐光伸一

監査委員：小林暁子、斎田道子

(会則第15条(改正後)に基づく事務局、会誌編集委員会および部会)

事務局：(事務局長)佐光伸一、(副事務局長)栗原朋友子、(会計担当)佐々木保子、(事務局員)ラファウ・ジェブカ

会誌編集委員会：氏間多伊子、尾形芳秀、栗原朋友子、越野剛、佐光伸一、ラファウ・ジェブカ

記念誌編集委員会：安藤厚、氏間多伊子、小笠原正明、尾形芳秀、栗原朋友子、越野剛、小林暁子、小林美保、斎田道子、佐々木保子、佐光伸一、霜田千代麿、ラファウ・ジェブカ

(会則第16条(改正後)に基づく東京事務所)

東京事務所：霜田英麿

第6号議案 会則の改正について

以下の条項を新設する。

第15条 本会に事務局、会誌編集委員会および各種の事業を推進するための部会をおくことができる。その構成、運営に関する事項は運営委員会において決定する。

* これまでの第15条は第16条に、第16条は第17条に変更する。

* 2014年10月31日改訂 とする。



懇親会風景 (歌：シーシャンティ「海物語」指導：ラファウ・ジェブカ、ミハウ・マズル&安藤むつみ「最後の日曜日」)

2014年度 収支決算書				
(自2013年10月1日～至2014年9月30日)				
【収入の部】	予算	決算	備考	(単位：円)
会費	200,000	286,920	全額の85% (新年度分57,000円含)	
寄付金	30,000	97,000	個人16名、広報文化センター5万	
その他	50	33	北洋銀行利息	
小計	230,050	383,953		
前期繰越金	47,093	47,093	郵便振替 10,000円、現金 37,093円	
合計	277,143	431,046		
【支出の部】				
事業費	100,000	111,135	第27回<総会>1万 <後援事業>ルトスワフスキ2,8万 第68回<朗読会>5,4万 第69回<東京例会>1,8万	
連絡費	50,000	38,416	ポーレ発送・はがき・切手他	
編集費	20,000	30,501	ポーレ制作費(81-83号)3回	
会合費	20,000	5,552	運営委員会	
事務費	25,000	13,149	トナー・文具	
予備費	62,143	11,114	ホームページサーバー、ドメイン他	
小計	277,143	209,867		
次期繰越金	0	221,179	郵便振替179,406円、現金 41,773円	
合計	277,143	431,046		

2015年度 収支予算書				
(自2014年10月1日～至2015年9月30日)				
【収入の部】	前年度決算	予算	備考	(単位：円)
会費	286,920	200,000		
演奏部会基金取崩	0	150,000	記念誌刊行準備金	
寄付金	97,000	30,000		
その他	33	30	銀行利息	
小計	383,953	380,030		
繰越金	47,093	221,179		
合計	431,046	601,209		
【支出の部】				
事業費	111,135	80,000	第28回<総会>2万、第70回<展示会>経費なし <その他例会>6万	
25周年記念事業費	0	200,000	記念誌刊行(印刷支払分)	
連絡費	38,416	40,000	ポーレ・記念誌発送、はがき、切手他	
編集費	30,501	30,000	ポーレ制作費等	
会合費	5,552	20,000	運営委員会他	
事務費	13,149	35,000	電話料金、トナー、文房具、IT関連他	
予備費	11,114	196,209		
小計	209,867	601,209		
次期繰越金	221,179	0		
合計	431,046	601,209		

演奏部会基金	【収入の部】	【支出の部】	備考	(単位：円)
繰入金	357,371		2012年9月1日、北洋銀行(普)に開設	
取崩		150,000	2012-2013年度「一般会計」に繰り入れ	
残高		207,371		
取崩		150,000	2014-2015年度「一般会計」に繰り入れ予定	
残高		57,371		

《ラジオ深夜便より》

ワルシャワ・フィルハーモニー

岡崎 恒夫

ここポーランドに住んでいて、よくポーランド人から「どうして日本人はそんなにショパンの音楽が好きなのですか」と聞かれます。簡単に答えられる質問ではないので、旋律の美しさのこと、作曲の背景、彼の人生などが日本人の共感を招くのではと答えています。そのショパンをしのんで5年に一度開かれる「国際ショパンピアノコンクール」の会場であるワルシャワ・フィルハーモニーをご紹介します。

建てられたのは1901年で、パリのオペラ座を模して造られました。初演はその年の11月5日で、エミル・ムイナルスキという当時最高の音楽家が指揮をして、ピアノを演奏したのがこれも当代一流のイグナツィ・パデレフスキでした。ちなみにパデレフスキはピアニストでありながら首相にもなった珍しい人で、いかにも音楽立国ポーランドにふさわしい人物だったと言えます。このパリオペラ座風の建物は第2次世界大戦中、ナチス軍の空爆で全壊しました。そのとき楽員の半数が亡くなったそうです。

世界大戦が勃発するまでにこのフィルハーモニーのホールで演奏した人は——指揮者では、オットー・クレンペラー、プロコフィエフ、グリーグ、ラフマニノフ、モーリス・ラベル、カミル・サンサーンス、リシャルド・シュトラウス、ストラビンスキーがいます。

ピアニストでは、ルビンシュタイン、ホロヴィッツ、ウィルヘルム・ケンプ、バイオリニストではヤシャ・ハイフェッツ、サラサーテ、ジャック・チボー、イザイ、チェリストではパブロ・カザルス、ガスパル・カサドと言った世界で最も有名な音楽家たちが綺羅星のごとく次々に演奏を繰り返していました。

第2次世界大戦で破壊されたフィルハーモニーの建物が再建されたのは1955年のことで、名称も一都市のワルシャワ・フィルハーモニーから国立ワルシャワ・フィルハーモニーと格上げされ、同時にフィルハーモニー付きの混声合唱団も結成されました。現在フィルハーモニーは112人の楽員と100人の合唱団員をかかえています。大ホールと室内楽用の小ホールがあり、大ホールは1,072席、小ホールは378席を持っています。

現在このフィルハーモニーでは、恒例の「ワルシャワの秋」という現代音楽祭が開かれています。そして、1年後の2015年にはショパンコンクールで賑わいます。

フィルハーモニーの主な活動は、1週間のうち定期演奏会は金曜日、土曜日で、木曜日は若者向けの格安コンサート、日曜



日は子供向けの特別コンサートが開かれます。私もうちの子供たちが小さかったときこの日曜日のコンサートによく足を運んだものです。演奏中、子供たちが曲に合わせて踊ったり、いっしょに大声で歌ったりしても、誰からも何も言われない楽しい音楽会です。日曜日の11時から3-6歳、14時から7-12歳となっていて、小さい子供達は休憩を挟んで75分の演奏、大きい子供達は90分となっています。

私は音楽が好きですから、一年間の通し券(回数券のようなもの)を3種類毎年購入しています。シーズンは10月に始まり、終わるのは5月なので、ちょうど8ヵ月になりますが、一枚の通し券が7回分ですから、他の特別コンサートを入れるとほとんど毎週通っていることとなります。

驚くのはその料金です。座席は4段階に別れていますが、最上席は7回分で350ズロティ(1万円くらい)、一番安いのが200ズロティ(6千円くらい)、子供用は最上で125ズロティ(3,750円)、安いのが100ズロティ(3千円)です。これは年間通し券の値段ですから、お間違いなく。と言うことはこの値段を7(回)で割ると、1回が上から、1,500円、860円、子供は540円、430円となります。子供券には大人の分も含まれているので、どんなに安いかお分かりになるでしょう。

フルオーケストラの演奏で、さらに国内外の有名なソリストが出演してこの料金でやっつけられるはずがありません。ここで、注目すべきは文化事業に対する国家の補助金です。音楽に限らず、演劇、絵画、その他の文化的催し物への国家援助は膨大で、そうでなければ、国民は気軽に音楽鑑賞など出来ないでしょう。このような処置が取られるのも、国が文化というものを高く評価し、その文化こそが国民社会ひいては人間の尊厳に関わっている事業であることを知っていることに他ならないと思うのです。

岡崎先生に外務大臣表彰

岡崎恒夫先生は「1970年代から40年以上にわたり、ポーランドにおける日本語教育の発展に寄与し、多くの優秀な卒業生を育成し、ポーランドの日本研究・日本語学習の環境を整え、日本文化の普及にも大きな足跡を残されている」ことから、今年度(2014)の「日本外務大臣表彰」を受けられました。伝達式は10月28日(火)に山中誠大使出席の下、ワルシャワ大学図書館で、第8回ワルシャワ大学日本祭に併せて行われ、ノヴァク・ワルシャワ大学副学長をはじめ、ワルシャワ大学関係者、日本研究者、教え子などが多数出席し、とてもなごやかな会だったそうです。岡崎先生の教え子には、ヤドヴィガ・ロドヴィチ前駐日大使をはじめ、歴代のポーランド大使館文化担当官(ブワシチャク広報文化センター長ほか)、ワルシャワ大学はじめ国内外の日本学科で教えている多くの日本学者がいて、みなさん両国の文化交流にたいへん貢献されています。(安藤厚)

(写真出所)在ポーランド日本国大使館 HP「ワルシャワ大学岡崎上級講師に対する外務大臣表彰伝達式(10月28日)」/Embassy of Japan in Poland (Facebook) Dyplom Ministra Spraw Zagranicznych Japonii dla Pana T. Okazaki



外務大臣表彰伝達式で 岡崎氏と山中大使(上) /ワルシャワ大学の学生たち(下)

《東京事務所より》

ポーランド大統領訪日記念Jazzコンサート

ポーランド大統領の訪日は延期になりましたが、日米欧混成による訪日記念 JAZZ コンサートは予定どおり11月26日ヤマハホールで開催され、私も広報文化センターのご招待を受け、所用で上京した兄(副会長)とともに楽しませていただきました。

開演に先立ち、ポーランド民主化25周年を記念したゴザチェフスキ駐日大使のご挨拶と、そのために作成された、民主化直後の驚きと混乱を示す短い映画も上映されました。大使は私どもの席を一つ隔てて着席され、Jazzがお好きなのかどうかは分かりませんが、演奏中は一切席を立たずに、アンコール演奏まで楽しそうに聴いておられました。

演奏者は、日本人ピアニストのクリヤ・マコトをはじめ、ポーランドを代表するサクソ奏者のシルヴェスタ・オストロウスキ、トランペット奏者ピョートル・ヴ

ォイタシク、アメリカ人のベース奏者エシェット・オコン・エシェットおよびドラムス奏者のニューマン・ティラー・ペーカーによるクインテット(5重奏団)です。

この演奏会は欧州ヤマハが協賛しているそうで、やや小柄なピアニストは、ヤマハのフルコンサート・ピアノを、スウィングしながら終始椅子から飛び上がりつつ打鍵している姿が印象的でした。

曲目の中にはスタンダードな聴いたことのある旋律も含まれていましたが、一切の説明なしに、一気にフォルテッシモで演奏して聴衆を圧倒しました。一方、中程ではパーカッションが、アメリカの古い洗濯板を、両手の指に金属キャップをはめて、ソロで軽妙なリズムを刻むと、それに呼応して決して響きすぎない音量で、多国籍ユニットのジャムセッションが同調する姿は感動的でした。

実は日頃建築音響に従事しているもので、ドラムや管楽器を多用するJazzや吹奏楽の演奏は、小規模な音楽ホールでは個々の楽器の音が聞き取りにくくなるという傾向を十分承知して聴いていました。

霜田英麿(本会東京事務所)





《北海道のポーランド人から》

誓います / Przysięgam

～日本とポーランドの結婚式について～ (2)

アグニェシュカ・ポヒワ

前回は日本とポーランドの法律上で見た婚姻の成立の相違についてお話ししました。今回は両国の結婚式、つまり法律と関係のない儀式の種類を比べてみましょう。

日本の結婚式を見ると神前式、キリスト教式、人前式という3つの種類の式が一般的に行われていますが、神前式は日本の宗教と伝統から由来し、キリスト教式はカトリック・プロテスタントの宗教と、それに伴う西洋(主にアメリカ合衆国)の伝統が由来です。一方、人前式は宗教の要素を抜いたキリスト教式に似ており、自由自在のスタイルで行われています。式を挙げる場所も様々で、神社、レストラン、ホテル、教会風結婚式場などがあります。

面白いことに、日本では神前式とキリスト教式を希望するカップルはその宗教の信者でなければならないという条件は全く存在しません。なぜかという、現在の日本社会では一般的に、どの宗教・宗派を信仰しているかはそれほど重視されず、また個々人も自らの信仰を殊更に意識することが少ないためです。一つの宗教を信じるより、人生の中のイベントや年中行事によって宗教を選ぶという日本独特の考え方があり、結婚式も宗教的な儀式というより、風習・伝統に当たるものになっています。以上から見ると、たとえキリスト教式を選んだとしても、本物の教会で本物の神父・牧師がいる本物の儀式ではなくても、誰も(信者を除いて)気にならないのです。

最後に人前式に触れると、神父・牧師のいないキリスト教式風に行われる場合がほとんどですが、特定宗教とは無関係であるため、ほかの宗教また

は伝統から好きなアイデアをいいとこ取りして、挙式を独創的にカスタマイズできます。日本のように結婚式のスタイルを好きに選べる国はほかにあるのだろうか、たまに不思議に思います。

では、ポーランドの結婚式には、どんなものがあるのでしょうか？

残念ながら、日本ほどバリエーションはないのです。ポーランドの国民の約 95%がカトリック教徒で、そのうち 75%が敬虔な信者であるため、ポーランド人の価値観や日常生活にはカトリックの信仰が根付いています。結婚式も一般的に教会で行われるカトリック式がほとんどで、進行は決まっており、自由にスタイルを選ぶことはあまりできません。さらに結婚の準備としてさまざまな手続きと宗教的な儀式を済ませなければならないので、日本の教会結婚式とポーランドの教会結婚式とは、表面は似ていても裏はまったく別のもので、日本の「偽神父」と「偽教会」を強く批判する人も珍しくありません。

無宗教、また教会の挙式を望まないカップルは、役所でシヴィル・ウェディングをあげるのが一般的です。人前式というコンセプトはいまだにあまり知られていないようです。かならず役員の前または神父の前で結婚を誓うことになります。

以上、日本とポーランドの結婚式の挙式の種類をまとめてみました。

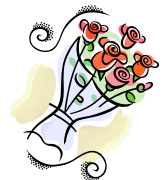
今回は、両国の実際の式の流れに移る前に、結婚式のための準備について紹介したいと思います。

(つづく)



Agnieszka Pochyla

1983 年ポーランド・シロンスク県ヤストシェンビェ・ズドレイ (Jastrzębie-Zdrój) 生まれ。ボズナニ大学新言語学部卒 (日本学修士)。日本政府奨学金を受け北海道大学に2回留学した。現在フリーカメラマンとして活動中。



トルンの斜塔

—— 修道騎士の罪 ——

何百年も前の昔のこと、トルンのドイツ騎士団の城の中に 12 人の十字架の騎士が住んでいました。そのうちの一人は際立って眉目秀麗(びもくしゅうれい)な青年騎士でしたので、町の多くの娘たちが彼を好きになりました。しかし娘たちのうちの誰一人として騎士の心を動かす者はいませんでした。

ある日、十字架の騎士がトルンの町を散歩していたとき、たいへん見目うるわしい乙女がふと彼の目に留まりました。騎士は一目見ただけで娘が好きになりました。美しい娘のほうも若い騎士が好きになりました。そして二人は毎晩ひそかに逢瀬(おうせ)を楽しむようになりました。

ある時、トルンの町の人々は二人の恋愛に気づき、憤慨(びんがい)しました。

「修道士ともあろう者が娘と逢引きするなんて許せないわ！」花売り女のマリーナが叫びました。

「騎士と娘を処罰(じょばつ)すべきだ！」肉屋のバズィリが

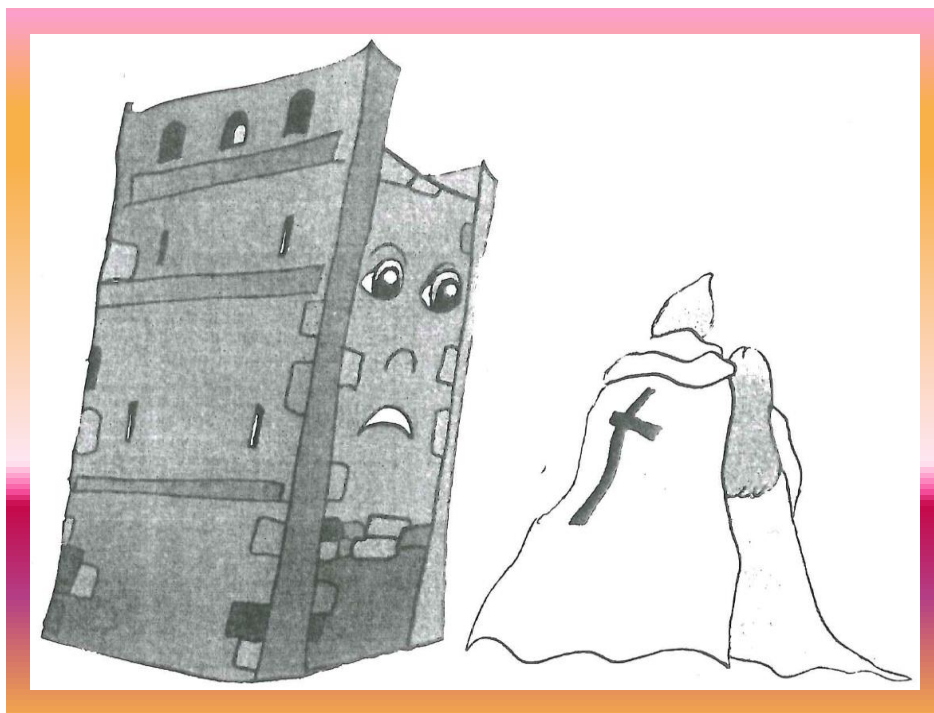
要求を出しました。

二人のうちのどちらのほうに罪が重いのか、いろいろ審議(しんぎ)が行われました。その結果、両者ともに罪がある、と確認(きんぬ)されました。娘には鞭打ち(むちうち)の刑(けい)が宣告(きんこ)され、修道士には、彼の生活(せいかつ)が曲(まが)っていたように、曲(まが)った塔(た)を建設(けんせつ)する労役刑(らうえきけい)が科(と)せられました。

そのようにして曲(まが)った塔(た)が建てられ、それは今日(こんにち)もトルンの「斜塔 Krzywa Wieża」として残(のこ)っています。

伝説(でんせつ)によれば、自分に罪(つみ)が無いことを斜塔(しゃた)で確か(たしか)めることができるといいます。そのためには、まず塔(た)の下(した)に立(た)って、背中(せなか)を壁(かべ)につけ、両手(りょうて)を真(ま)っ直(ちか)ぐ前(まへ)に突き出(突きだ)すように伸(の)ばします。もしその姿勢(しせい)でしばらくのあいだ立(た)っていられば、罪(つみ)が無いことになりま

栗原 成郎(東京大学名誉教授)



Legendy Toruńskie, «Literat», Toruń, 2007 より

《ピウスツキ特集》

ブロニスワフ・ピウスツキと 二葉亭四迷

沢田 和彦

ポーランドの民族学者ブロニスワフ・ピウスツキ(1866-1918)が日本を訪れたのは、1902(明治 35)年8-9月、1903年7-10月、1905年10-11月、そして1905年12月中旬-1906年8月3日の都合4回で、彼はわが国で実にさまざまな人々と交渉を持った。例えば亡命ロシア人・ポーランド人革命家、孫文、宋教仁、黄興のような中国人革命家、ジャーナリストの横山源之助、松田衛(まもる)、鈴木於兔平(おとへい)などの東京外国語学校露語科関係者や、上田将(すすみ)、軍司義男、高井万亀尾(まきお)のような日本ハリストス正教会の神学校の出身者、片山潜、幸徳秋水、堺利彦、加藤時次郎、石川三四郎、阿部磯雄などの社会主義者、政治家、鳥居龍蔵、坪井正五郎のような民族学者や関場不二彦、村尾元長、神保小虎といったアイヌ研究家、下田歌子、雛田(ひなだ)千尋のような女性教育者、今井歌子、遠藤清(きよ)などの女性社会運動家、女流音楽家の藤井(三浦)環(たまき)と橘糸重(いとえ)などである。名前が判明している日本人だけでも優に百名を超える。ここではそのなかでも最も親しい関係を結んだ二葉亭四迷との交流について紹介しよう。

1906年初頭、ピウスツキは東京で二葉亭四迷、本名・長谷川辰之助のもとを訪ねた。二葉亭は1904年から大阪朝日新聞社東京出張員となっていた。彼は文学の世界に踏み込んでからも対露政策に関心を持ち続け、ロシア革命派への関心を強めつつあった折にピウスツキに出会ったわけで、ピウスツキに物心両面で惜しみなく援助を与え、さまざまな人々に引き合わせた。二人はほとんど毎日行き来し、短時日のうちに極めて親密な間柄となった。二葉亭はピウスツキについてこう述べている。

「▲現に自分の知って居る露人中に斯様の人物が一人居る。西比利亚で苦役に服し、今は四十才位であらうか、未だ家をなさない。而もアイヌ救済を一生の大責任と心得て、東京まで出て来た。所が世間が餘りに冷淡なので大に憤慨して居たやうだ。▲さらば御當人はと言へば、囊中屢ば空しと言ふ有様で、衣服などは粗末で、食物などは何をも選ばぬ、生命さえ継

さわだ・かずひこ 1953年大阪府生まれ。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程修了、文学博士。現在、埼玉大学教養学部教授。著書に『白系ロシア人と日本文化』(成文社、2007)、『日露交流都市物語』(成文社、2014)など。



げば、夫れで充分だ、どうしてもアイヌの如き憐むべき人種を保護しなければならぬと考えて居る。▲局外から見れば、実に馬鹿げて居るやうだが、其のあどけない真面目の態度が、吾々の同情を惹く所である。」

まもなくピウスツキは二葉亭を見込んで、革命党の資金作りのためにニコライ・ラッセルがハワイに持つ邸宅農園の売却に協力してほしいと頼んだ。ラッセルは日露戦争時に日本に送られたロシア・ポーランド俘虜兵士に革命思想を鼓吹する目的で来日した亡命ロシア人革命家である。二葉亭は張り切ってピウスツキとともに『毎日新聞』社主・島田三郎、大隈重信、女子教育で名高い巖本善治、板垣退助らを訪ねた。この要人訪問はいずれも不成功に終わったかに見えたが、それがラッセルの土地売却のためというのは名目上のことで、実は日本政府が亡命ロシア人・ポーランド人革命家をロシア政府に引き渡すつもりかどうかを打診するためのものだったのである。この年の春にロシアは日本に対して、政治犯を含む犯罪者引き渡し協定の締結を申し入れていた。打診の結果は、その恐れはないであろうというものだった。まもなく二葉亭は革命派の運動に冷淡になっていったが、ピウスツキとの交際は変わりなく続いた。二葉亭は彼の「年を取った小児」のような人柄を愛したのである。帰国が決まった時、「イの一番に尋ねたのは、長谷川君の家で、二十幾貫の大男が飛びついて、潜々(はらはら)と涙を出して、君に喜悦を分つた」という。

ピウスツキに文学の素養があったことも、両者の交遊を途切れさせなかった一因だろう。ピウスツキと二葉亭は日本・ポーランド協会を設立し、両国の

交流をすすめるために、「先づ一番容易で、一番故障の少ない文学」の翻訳、紹介を取り上げることにした。ピウスツキはガリツィア(オーストリア領ポーランド)に戻った後、クラクフでシェロシェフスキ、ワシレフスキ、シマンスキといったポーランドの代表的作家、批評家に自作の推薦やその露・独・仏・英訳の寄贈を求め、それらを二葉亭に送ってきた。東京に日ポ協会付属図書館を設けるためである。そしてこれらの作品の日本への紹介を二葉亭に繰り返し依頼した。

そのうち二葉亭が訳出したのは、ネモエフスキの散文詩『愛』と自然主義作家プルスの『棕のミハイロ』である。『愛』は革命家の心境をシンボリックに歌ったものであり、『棕のミハイロ』は二葉亭の翻訳中、乞食や無宿人のような社会の最下層の人間を扱った作品群に属する。後者はマリア・ジャルノフスカ送付のロシア語訳からの重訳である。ピウスツキはガリツィアに戻った後、幼馴染みの人妻マリアと一時期一緒に暮らした。これらの翻訳は女性解放運動家・福田英子の雑誌『世界婦人』に発表された。そして同誌はあたかも日ポ協会の機関誌のような役割を果たすようになった。1906年2月に二葉亭を福田に紹介したのはピウスツキである。

一方二葉亭も1907年、ピウスツキに森鷗外の『舞姫』と木下尚江の長編小説『良人の自白』のそれぞれ英語版を送った。だが前者は日本文学の特徴が表われていないという理由で取り上げられず、後者のみがポーランド語に翻訳されたようだ。

宿願かなって二葉亭がペテルブルグの月刊誌『ロシアの富』に寄稿することになるのも、ピウスツキとマリアの斡旋による。同時に二葉亭自身の小説のピウスツキによるポーランド語訳を、ポーランドの『スフィンクス』誌に寄稿することも決まった。だが二葉亭は結局いずれの雑誌にも原稿を送らなかったようだ。

二葉亭は1908年夏に『朝日新聞』特派員としてペテルブルグに赴き、そこでマリアに会うが、ピウスツキとの再会はならなかった。翌1909年6月1日にピウスツキは、次のように始まる手紙を二葉亭に書いた。

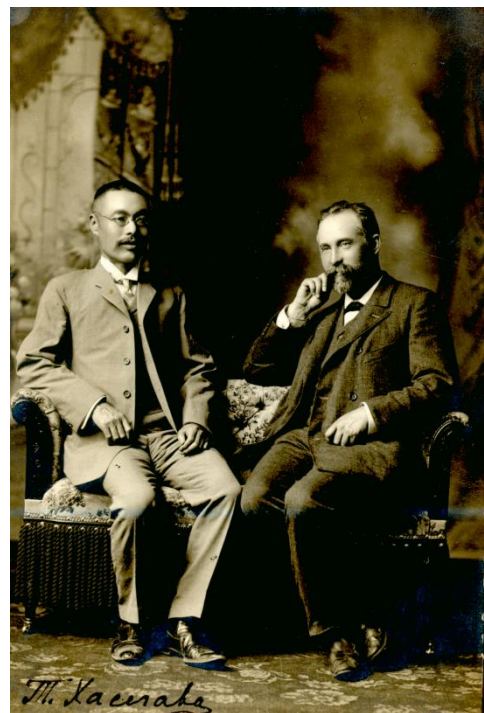
「深く尊敬する親愛なる長谷川さん あなたの発病と突然の帰国を妻から知り、悲しくて堪りません。これでこのヨーロッパでお会いできなくなりました。それを私は心から望んでいたのですが。」

だがこの時点で二葉亭はこの世の人ではなかった。同年2月に二葉亭はウラジーミル大公の葬儀に参列して風邪をこじらせ、肺炎と肺結核を発症し

た。そして5月10日、船で帰国の途次、ベンガル湾上で死去したのである。ピウスツキは1910年に「シギ 長谷川」と題する二葉亭の追悼記事をポーランドの雑誌『世界(シフィアト)』に発表した。以下にその一部を紹介する。

「彼[長谷川]の死とともに、ポーランド語をマスターし、直接ポーランド語から日本語に翻訳ができて、人種的、地理的には遠いが、多くの点で互いにきわめて近い二つの民族の間の精神的な絆を保つことができる作家を日本で短時に獲得する、という望みは消えてしまった。長谷川はロシア語がとてよくできたので、少なくともポーランドの作家の作品を原文で読む程度には、大した苦勞もなしにポーランド語を習得することができただろう。[中略]わが民族に対して心からの友情をいただき、それを行動によって証明しようとした気高い人物の逝去を、私は心から悼む。」

なお筆者はこれまでに以下の2点を編集、刊行した。
A Critical Biography of Bronisław Piłsudski
 [Preprint]. 2 vols. Edited by Kazuhiko Sawada and Kōichi Inoue. Saitama, Saitama University, 2010, ii+8 illust.+490 p.; 8 illust.+498 p.
 『ポーランドの民族学者ブロンニスワフ・ピウスツキの生涯と業績の再検討』沢田和彦編(埼玉大学教養学部リベラル・アーツ叢書, 5)埼玉大学教養学部・文化科学研究科, 2013.3, 131頁



二葉亭とピウスツキ(1906年6月19日、東京・本郷の中黒写真館にて)

ボクが初めて 寺山修司に会った日

霜田 千代麿

今年は寺山修司が亡くなって31年となる。

ボクが初めて寺山修司に会った日のことは、今でもハッキリと覚えている。それは1973年10月の事であった。その前年1972年10月から、ボクはポーランド人民共和国へ演劇の勉強のため留学していた。当時、ポーランドでは何の目的であれ留学した人間は、ウッチ大学付属の外国人のためのポーランド語学校で1年間ポーランド語の勉強をすることが義務付けられていた。

その日久しぶりに学校のあるウッチ市から汽車に乗り、首都のワルシャワに出て来て、日本におられる時から面識のある、ヘンリック・リプシツさんへ電話を掛けた。ヘンリックさんが、演劇の勉強のため早稲田大学に留学した当時、ボクは彼にお目にかかっていた。後に彼は、ポーランドの民主化の立役者、連帯労組のヴァヴェンサ(ワレサ)大統領のとき、駐日大使も務められた方である。

「ああ、シモダさん、久しぶりです。お元気ですか？(流暢な日本語である)アナタ丁度良い所でした。実は今、ヴロツワフ市の国際青年演劇祭へ出演するため、寺山修司の“天井棧敷”がワルシャワに来ているのですよ。シモダさんも演劇の勉強のためポーランドへいらっしゃってるんですから、どうですか、通訳を兼ねお手伝いをしてもらえませんか」というようなことが彼の口から伝えられた。

「勿論、ボクとしては願ったりですよ。ヴロツワフ市でも、演劇祭のチケットが手に入らなくて、困っていた処ですよ」

それから直ぐ、ヘンリックの教えてくれた稽古場へ行ってみた。そこでは、中学生みみたいな感じの若者の一団が歌ったり、踊ったり、怒鳴ったりしていた。60年代から70年代中頃迄、“天井棧敷”はアングラ(アンダーグラウンド＝地下)劇団として、寺山修司の下、前衛演劇の旗手を誇っていた。その風評は、日本国内より外国での方が、いち早く一世風靡していた。そんな中、京都の“くるみ座”(主宰毛利菊枝)の俳優研究所を出て、飛鳥井塾で芝居をして、演劇グループ“夏”を主宰し、そして今、ポーランドのグロトフスキの処へ行って演劇の勉強をしようという自分には、寺山修司の“天井棧敷”は余りにも異質、異次元なものに思えた。

寺山修司という人間は、あくまでもダンディーな人であった。コートか、バーバリーを肩から羽織っていた。底高(厚底)のポックリ下駄(つかかけの様なもの、靴では決してなかった)を履き、ノーネクタイのシャツに、濃紺か黒の上下を端正な体にまとっていた。荷物は何も持っていなかった。新聞か週刊誌の様なものを丸めて手に持っていたかもしれない。ボクの話聞いて、ただ一言「いいですよ。ポーランドにいる間、アナタも“天井棧敷”の一員ですよ」と言って、受け入れてくれた。しかし、その責任がいかにかいものか、この時の自分には思いも寄らなかった。

国際青年演劇祭はポーランド西南部、ドルヌイ・シロンスク県の県都ヴロツワフ市で行われた。会場のポルスキー劇場(ポーランド劇場)は大変歴史的にも上演的にも、権威ある大劇場であった。

日本でもそうであろうが、ましてやポーランドの当時は社会主義国家の、教条主義的な文化の域を出ない、退屈な歴史劇しかやっていない劇場でいきなり、劇場責任者や舞台責任者との打ち合わせで、「…チョマロ…我々の今度の芝居には“火”が必要だから舞台で“火”を燃やすから…その様、通訳してくれ!」「アジェ…?」「ダメです。消防法があって、ポーランドの劇場の舞台では、いかなる火も厳禁です!」「チョマロ、この芝居(盲人書簡)は“闇と光”だ…わかるでしょう。“火”は不可欠な条件である」「チョマロ、バルコンにハシゴを掛け、舞台と同時進行でバルコンでも芝居をしたい。バルコンにハシゴを掛ける手配と、許可をしてもらいたい…」「アジェ!」次々と出される寺山さんの奇抜な要求と、ポーランド側の演劇事情の間に挟まれて、夜も眠れない有様であった。

“棧敷”は良い、何日かの公演がハネれば日本へ帰って行く。「ポーランドに残って演劇の勉強を続けて行くボクの立場はどうなるんだ…」「演劇をやってきたものとして寺山さんの狙っている演劇効果は痛いほど理解できる。アングラも正統もない。こうなったら日本の代表としての棧敷の芝居を成功させるしかない」。ボクの結論はそこに至った。「寺山さん…あまり説明しないで、必要なものを準備させて、ヌキうちでやりましょう。しかし、劇場を決して火事で燃やしてはダメですよ。日本とポーランドの外

交問題になりますからね」「…わかった…了解！」
そしてヴロツワフの国際青年演劇祭では“テンジ
ョウサジキ”というポーランド語が出来てしまった。
終演の次の日の午後、ヴロツワフ中央駅から、

パリー東駅行きの汽車で“天井桟敷”の一団は正
に“台風一過”のすさまじいカルチャーショックをポ
ーランド各地に残して去って行った。

—九條さんのこと—

ある年の国際寺山修司学会で、久しぶりで再会した。ポーランド以来3度目である。飲み物が置いてある控
室には誰もいなかった。紙コップを持ち、春日(はるび)射すベランダへ出た。

僕は思い切って彼女にこう質問した。「今頃、あのような本が出るのは、いかがなモノ
なんでしょうか？」それは、永年アムステルダムに住んでいた田中未知氏の帰国後まも
なく出版された『寺山修司と生きて』という、三角関係を思はせる本の事であった。

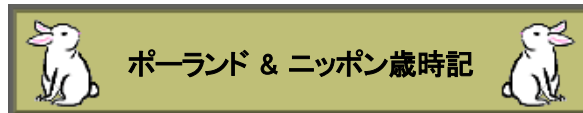
すると九條さんはこう言った。「アノネ、霜ちゃん、寺山修司
を愛した女はあまたいるのヨ…けどね、寺山修司が愛した女
は私一人よ！」キゼンというより、僕の目を見て諭(さと)すように
言った。ベランダは五月の光の中にあつた。



ご逝去の報に接し、心より哀悼の意を表します。 合掌。

- ※ 筆者は国際寺山修司学会の『寺山修司研究』にエッセイを連載、今春(2014年4月)第7号発行。
- ※ 本稿は「プレス空知」(2013年8月28日)を改稿
- ※ 九條今日子(寺山映子)氏、平成26年4月30日永眠(享年78)
- ※ 写真提供: ㈱テラヤマ・ワールド

〈連載俳句〉



秋です。俳句を詠みはじめたのは、秋でした。
秋には、新学年、つまり私と夫にとっての一年の
仕事も始まります。また、お隣さんから新しい生
命が宿ったことを聞かされたのも、ちょうど秋のこ
とでした。

jesienny powiew
nitka twojego życia
w kilimie świata

〈ポズナン市、津田モニカさん〉

モニカ

秋風にとぶ糸 生きる錦かな

千代麿

みむらさぎのしきときのみじかけれ

秋十月(実むらさき)紫式部の実

青女乗る蝦夷の炭住ブリキ屋根

冬十二月(青女)霜のこと

くずあんをかけていただく蕪蒸

冬十二月(蕪蒸(かぶらむし))かぶのむしもの

投稿(俳句、短歌、川柳など) 歓迎—事務局へハガキで

〈岩見沢市、霜田千代麿さん〉

目次

〈第71回例会ご案内〉カシュブ詩人ヤロミラ・ラブダ朗読会(佐光 伸一) 1
 カシュブ人とその言語および文学(野町 素己) 1
 ポーランドの巨匠ニジャウコフスキのアートマイム日本初公演を観て(霜田 英麿) 2
 ステファンカンパニー東京公演を終えて(児玉 忠征) 3
 〈第70回例会報告〉「ヤン・カルスキ展2014」札幌開催(尾形 芳秀) 4
 第28回定例総会&懇親会報告(佐光 伸一・氏間 多伊子・斎田 道子・小林 暁子) 5
 ワルシャワ・フィルハーモニー(岡崎 恒夫) 8
 岡崎先生に外務大臣表彰(安藤 厚) 9
 ポーランド大統領訪日記念 Jazz コンサート(霜田 英麿) 9
 日本とポーランドの結婚式について(2)(アグニェシュカ・ポヒワ) 10
 トレンの斜塔(栗原 成郎) 11
 ブロニスワフ・ピウスツキと二葉亭四迷(沢田 和彦) 12
 ボクが初めて寺山修司に会った日／九條さんのこと(霜田 千代麿) 14
 ポーランド&ニッポン歳時記(津田 モニカ・霜田 千代麿) 15

今後の活動予定

〈第71回例会〉

カシュブ詩人 ヤロミラ・ラブダ朗読会

日時：2月5日(木)18:30～

場所：北海道大学クラーク会館 3F

国際文化交流活動室
 (札幌市北区北8西7)

内容：①野町さんによるカシュブ語概説
 ②ラブダさんによる詩の朗読(カシュブ語)
 と解説(ポーランド語)(翻訳/通訳つき)
 ③質疑応答

入場無料、事前申し込み不要

新会員をご紹介します

山本伸一さん

ご寄付(維持会費)ありがとうございます

感謝をもってご芳名を掲載いたします。
 (2014年9月～12月はじめ)

高橋健一郎(2) 片山明石(1)

安藤 厚(2) 猪狩令子(1)
 安藤むつみ(2) 霜田千代麿(2)
 霜田英麿(4) 塚本智宏(2)
 栗原朋友子(2) 斎田道子(2)
 尾形芳秀(7) 児玉忠征(3)
 川染雅嗣(2) 山本伸一(2)

※()内は口数:1口千円、順不同、敬称略

《重要》年会費納入のお願い

新年度を迎えました。

2014年10月～2015年9月分の年会費(3000円、
 学生 1500円)、および維持会費(任意のご寄付:1口
 1000円)の納入をお願いします。

本会の活動は皆様の年会費とご寄付により賄わ
 れています。ご理解とご支持をお願いします。

【郵便振替口座】02740-5-19735



【名義】北海道ポーランド文化協会

※事務効率化のため、送金はできるだけ郵便局の ATM
 扱い(手数料は無料)をお願いします。

※未納額については、個別にお願い文を同封しており
 ます。